ご活用事例　愛知県海部郡大治町立 **大治小学校**

スモールステップではじめるICT活用 児童理解を深め、先生同士の連携で見守る

取り組み

- 毎朝、「心の天気」で自分の心の状態を記録
- 紙からタブレットへ、「心の天気」の段階的活用
- 授業内容の振り返りにおける「学びの天気」の活用

学校DATA

規模　全校児童数887人（32学級）※2022年1月時点

EDUCOM導入製品　EDUCOMマネージャーC4th・スクールWebアシスト・スクールライフノート・スクールMailアシスト（ICT機器の活用やトラブル対応、支援員訪問などのトータルサポートも実施）

概要　「自他を認め、生き生きと学び続ける児童の育成」を研究主題として研究に取り組み、令和2年10月に1人1台タブレットが導入され、ICT機器の効果的な活用のあり方についても研究を行った。

HP　https://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310180

お話を伺った先生

加藤 鋭之先生（校長）、峯村 美帆子先生（音楽専科/研究主任）、加藤 記子先生（2年担任/研究部長）、佐藤 友歌里先生（3年学年主任）、秋田 侑子先生（4年学年主任）

研究をきっかけに、子どもの気持ちを「天気」で表現

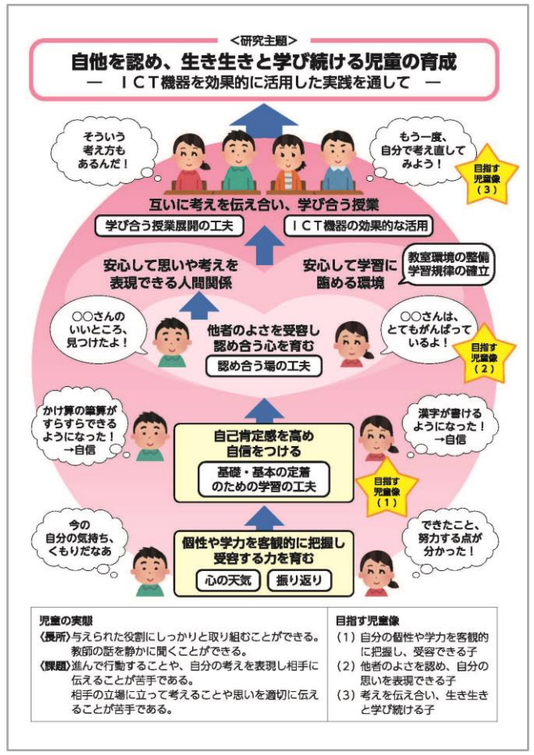
―― 「スクールライフノート」を使い始めたきっかけを教えてください。

峯村先生　研究がひとつのきっかけでした。本校の実態を洗い出して、研究の方向性を探っていたときに、子どもたち同士が認め合えるようになって、さらに学び合いになるといいねという話になりました。でも、認め合うためには、まず子ども自身が自分のことを知らないといけないねと話していたタイミングで、玉置先生（岐阜聖徳学園大学教授）に出会い、「スクールライフノート」を知り、「心の天気」「学びの天気」を利用するようになりました。

―― 「心の天気」「学びの天気」を使ってみてどのように感じましたか？

加藤先生　最初に玉置先生から、「心の天気」という言葉を伺った時には、何だろうと思いました。4つの天気マークから、子どもが自分の気持ちを選ぶと伺って、実際に先生たちでやってみるところから始めました。研究の手立てのひとつとして、基本は全員が取り組むよう、先生方にはお願いしています。

開始した当初（令和2年6月）は、まずは天気マークを印刷した紙を児童に配って丸をつけて提出してもらい、タブレット導入（令和2年10月）後に「スクールライフノート」で「心の天気」を入力するようになりました。



▲図１　大治小学校研究構想図

「どんな気持ち？」と聞くと、なかなか言葉では伝えられない子もいるので、そういう子たちにとっても、天気の中から気持ちを選ぶというやり方は、やりやすかったのではないかと思います。今はタブレットにも慣れてきたので、天気だけでなく、ひとことメモをたくさん入力している子も多くいます。天気の入力だけだったときよりも、なんでその天気にしたのかという理由がひとことメモを見るとわかりやすいです。

▲図２　「心の天気」画面イメージ

佐藤先生　研究の手立てとして、授業内容の振り返りを子どもたちが自分の言葉で表現する取り組みを行う中で、授業内容によっては、タブレットを活用して「学びの天気」を記録しています。振り返りとあわせて、そのときの気持ちも天気で表現してもらっています。基本的には、授業のあとに子どもたちが理解したか、していないかを把握するのに使っています。振り返りをノートに書かせると、かなりの量と時間がかかるのですが、「学びの天気」を使うことによって、子どもたちの今の理解度がすぐにわかるため、「くもり」や「あめ」が多いときには、ミニ授業をやったり声掛けをしたり、スピーディーに手立てを講じることができ、大変便利だなと思っています。

―― タブレットでの「心の天気」の入力をどのように習慣づけていきましたか？

加藤先生　現在はタブレットが１人１台あるので、自分のタブレットでログインして、入力しています。ただ、１年生については、入学してすぐは、タブレットの操作もひらがなもわからないため、１人ずつ呼んで、教師用PCで天気だけ入力してもらっていました。2学期の初めからは、１年生でもひとことメモを入力する子もいて、現在は自分のタブレットで入力しています。１・2年生はタッチパネルで手書き入力、3年生以上はローマ字入力でひとことメモを入力しています。速い子は2～3分で入力していますし、じっくり入力する子でも5～6分くらい。こだわっている子もいますが、わりと速く入力できていると思います。

まずは紙ではじめて、教師用PCで天気の入力、徐々に自分のタブレットでひとことメモを入力していくという段階を踏んであげることで、子どもたちなりに考えて入力してくれるようになりました。

峯村先生　自然とここまで来ましたが、スモールステップが大事だったなという気がしています。

秋田先生　朝の準備の時間に、子どもがそれぞれタブレットを持って行って入力しているので、担任の時間がとられたり、負担に感じたりすることもあまりないです。授業でもタブレットを使うので、「心の天気」も自然な流れで入力できています。

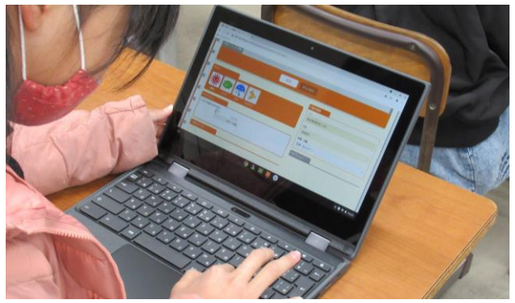
◀▼写真１、２
「心の天気」を入力する児童

―― 「学びの天気」に対する先生や子どもたちの反応はどうですか？

佐藤先生　「心の天気」は子ども同士がお互いに何を入力したかを見ることはできないのですが、「学びの天気」は教室のモニターに画面を映し出して、子どもたちがお互いの「学びの天気」を見られるようにしていることが多いです。友達の「学びの天気」を読むことができるので、「あ、この考えがいいな」など、交流の場を確保できるようになったのが、一番のメリットかなと思っています。

天気マークについては、モヤモヤが晴れた場合は「はれ」、話し合いでバトルして時間切れで終わった場合は「あめ」が多いので、授業に対するすっきり度合で入力しているように感じます。

加藤先生　低学年も「学びの天気」を利用することがありますが、タブレットを使わない授業のときに、わざわざタブレットを取りに行って入力するかというと、なかなかできていません。現状は、タブレットを使った授業のときに「学びの天気」を入力しています。



▲写真３　「学びの天気」を入力する児童

「心の天気」だから伝えられることがある

―― どのようなことに着目して「心の天気」を確認していますか？

加藤先生　子どもたちの入力状況を一覧で確認できる学校生活ウォッチャー画面のタイムラインで、クラス全員分のひとことメモに目を通して、気になった子に声を掛けるようにしています。「かみなり」の子はもちろん気になりますが、私のクラスには、「あめ」のマークが好きみたいで、いつも「あめ」を入力する子がいて、そういう子がときどき「くもり」にしたときには声を掛けるようにしています。必ずこういうときというよりは、「いつもと違うぞ！」というときに声を掛けています。

▲図３　「心の天気」学校生活ウォッチャー画面イメージ

佐藤先生　こそっと言いたいけど言えない恥ずかしがり屋な子ほど、一生懸命ひとことメモを書いて、サインを送ってくるので、文章の量が多いと声を掛けることもあります。

秋田先生　逆にいつもたくさん話しかけてきて、いろいろ話してくれるのに、大事なことは話さずに、「心の天気」に書いている子もいます。直接コミュニケーションをとるのとは違う、「心の天気」のような間接的なコミュニケーションも、子どもの気持ちを知るうえで大事なのかなと思っています。

―― 具体的には、どのような場面で声を掛けたのでしょうか？

秋田先生　基本的には「外が晴れていて運動場で遊べるからはれ」など、わかりやすい理由が多いですが、時には気になる理由の子もいます。たとえば、低学年の子では、朝の準備が間に合わなくて朝から嫌な気持ちになったから「あめ」を選んでいる子がいたり、給食に魚が出てくるのが嫌だから「かみなり」を選んでいる子がいたりします。直接は言えなくても「心の天気」で訴えてくれると、担任もどうしたら間に合うように朝の準備ができるかを一緒に考えたり、給食を食べている途中に声を掛けたりすることができます。

中学年や高学年になってくると、友達関係のことなどを「心の天気」で表すことも出てきます。「校外学習の班で苦手な子と一緒になっちゃった」のようなことも、直接は言いに来ませんが、「心の天気」には書くので、当日のバスやお弁当のようすを気に掛けて見ることができます。普段は先生に言うタイミングを見つけられない子でも、「心の天気」を利用することで言える雰囲気ができているので助かっています。

特別支援学級については、コメントを書いている子と書いていない子がいるみたいですが、「かみなり」が続いて声を掛けてみると、「家族が病気だから」と学校生活以外の話を聞けたり、その子がどんなことを抱えているのかを知れたりできるので子どもの理解に繋がることがたくさんあると聞いています。

―― 子どもに声を掛けることに悩むことはありますか？

加藤先生　どのタイミングでどうやって声を掛けるのかは、やっぱり悩みます。教室の中であっても、廊下であっても、周りにはほかの子どもたちもいるので、どれくらい気軽に声を掛けていいのか、ほかの子に聞かれてもいいのかというのは気になりますね。

峯村先生　私は音楽の専科で担任を持っていないので、毎日ではありませんが、子どもが帰ったあとに、自分が担当している学年を中心に「心の天気」を見ることがあります。ただ、子どもは私にいろいろな接し方をしてきていると思うんです。先生は知らないからいつも通りにいこうと思っている子もきっといるんじゃないかなと思うので、私はあえて声は掛けていません。ただ、「心の天気」で、もしかしたら子どもはこういうことを抱えているんじゃないかとわかることもあるので、自分の中でちゃんと持っておいて、出すところと引くところを調整しています。

子どもへの声掛けだけでなく、先生同士の声掛けや連携も

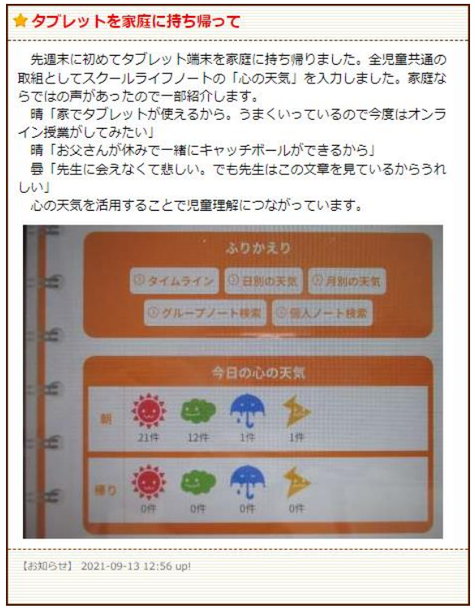
―― 管理職の立場では、「心の天気」をどう見ていますか？

校長先生　基本的には１年１組から順番に、毎日全クラスの「心の天気」を見るようにしています。全校通して、天気がいい日は「はれ」、雨の日は「あめ」という子が本当に多いです。もうひとつ多いのは、行事など特別な活動がある日は「はれ」。やっぱり行事は、子どもにとってすごく大事なんだなということを実感しています。あとは、私は長期で休んでいる子たちを気にして見ています。体調を崩して休んでいた子が久しぶりに登校してきた日の朝に、「やっと学校に来れたからはれ」と書いてありました。とてもうれしいし、きっとよい学級経営ができているんだなと思って、先生たちとは違う楽しみ方をしています。それから最近は「今日は家庭科があるからはれ」と書いている子がいると、何をやるんだろうと思って、学級のようすを見に行っています。あとで担任の先生に声を掛けるきっかけになっています。先生たちとは違う立場で毎日楽しみに見ています。

▲写真４　取材のようす（校長・加藤先生）

実は、今年の４月に異動してきて、３月末に峯村先生と加藤先生から研究の概要を聞きました。そのときにはじめて「スクールライフノート」というものを知りました。研究自体は、前任の校長先生や先生たちから話を聞いて、ゴールがあるから安心だと思いましたが、問題は「スクールライフノート」が何かわからないことでした。玉置先生の本で活用法や見方を読んでみて、自分も「心の天気」を見て伝えられることがあったら先生に伝えていけばいいんだなと思ったのが、ゴールデンウイーク明けくらいのことです。

私も子どもたちに自分が「心の天気」を見ていることを言っていいのか、いまだに悩んでいます。今は、学校ホームページや学校だよりで、少しずつ「心の天気」の紹介を載せて発信しているという段階で、子どもたちにあえて声は掛けていません。そうした発信で保護者の理解も深めていければと思っています。保護者の中にはタブレットは学習の道具だと思っている方もいると思うので、ほかのことにも活用できるんだということを伝えていきたいなという思いが一番強くあります。保護者の理解を深めていくことで、家庭での教育の促進につながらないかなと思います。



▲図４　学校ホームページ記事（2021/9/13投稿）

―― 担任の先生以外から声を掛けることはありますか？

秋田先生　校長先生もおっしゃられたように、担任だけでなくて、管理職の先生や保健室の先生、通級指導教室の先生、専科の先生も「心の天気」を見てくださっています。担任ばかりが話しかけるとうっとうしがられてしまうので、たとえば、用もないのによく保健室に行く子に保健室の先生から声を掛けてもらっています。いろいろな先生から子どもに声を掛けてもらうことで、それをきっかけに継続的に支援してもらえ、先生同士で連携をとることができています。

継続した実践の先に見えてくるもの

―― 他校で取り組むときに大事にしたほうがよいことはありますか？

峯村先生　子どもたちに「心の天気」を入力させるだけではなく、先生たちも見ているという信号を送り続けることが一番大事だと思います。子どもたちも入力するだけでは、やった甲斐がなくなって、だんだん疎かになってくると思います。ただ、学校の仕事は多岐にわたるため、ほかに優先しなければいけないこともあります。そうしたときに、「心の天気」を見る時間をどのように生み出していくか、ということも今の課題です。時間の確保が大事かなと思います。

あとは、担任だけに任せきりにするのではなく、多くの人の目で「心の天気」を通して子どもを見ていくこと。指導の壁にぶつかっている担任もいると思うので、ほかの先生たちも知っていることで、担任が一人で抱え込まずに済み、助けになると思います。

校長先生　本校はお互いに学び合おうという教職員の集団であるということに恵まれた、これに尽きると思いますが、「全員」が同じことをやっていて、「毎日」使えるものがある。「全員」「毎日」というのがポイントだったと思います。

峯村先生　研究というきっかけがあったおかげで、がんばって取り組みました。取り組んだことによって、「心の天気」や「学びの天気」のよさに気づきました。最初は取り組むことに積極的になれなくても、まずはやってみることが必要だと思います。

▲写真５　取材のようす（校長室にて）

成果

- ✓ スモールステップによる「心の天気」の導入で、「全員」が「毎日」使うことを実現。
- ✓ 担任以外の先生も子どもの状況を把握し、先生同士で連携して子どもの継続的支援。
- ✓ 「学びの天気」で子ども同士の交流の場を確保。

今後に向けて

- 「心の天気」を見る時間をどうやって生み出すか。
- 「心の天気」を利用した子どもへの声掛けのタイミング。担任以外の先生の子どもへの関わり方。
- タブレットを利用する授業以外での「学びの天気」の活用。

※この記事は2021.11.29時点の取材を元に作成しています。

愛知県海部郡大治町立 大治小学校